

【共同研究】

八丈島・青ヶ島におけるカナヤマサマ信仰

—呪詛・ミコ・病い—

土屋 久* 堀口 久五郎**

Research on the Kanayamasama beliefs on the islands of Hachijojima and Aogashima

Hisashi TSUCHIYA, Kyugoro HORIGUCHI

This paper reports on aspects of the healing deity Kanayamasama based on investigations on the islands of Hachijojima and Aogashima.

Results are as follows:

- 1) Kanayamasama is a deity that possesses an ambivalent nature with the power to curse and lift curses.
- 2) Fujou caused by a curse is thought to cause illness on both islands. Because Kanayamasama possesses power to lift Fujou, she is revered as a healing deity.
- 3) On both islands, shrine maidens play a large role in determining the character of Kanayamasama.

In light of these findings, this study noted to need to understand health in terms of folk customs on both islands when discussing actual issues in the areas of medicine and welfare.

はじめに

本稿は、カナヤマの治癒神としての側面を、八丈島・青ヶ島での調査に基づいて報告し、両島における健康観の一端を明らかにすることを試みるものである。

カナヤマは、一般に「金山」と漢字表記され、鍛冶屋のカミ、火のカミとして知られた民俗神である。この点は八丈島・青ヶ島でも同じである(八丈島、青ヶ島では、カナヤマサマといわれる場合が多い。よって、以下、カナヤマサマと表記する)が、両島では、力の強いカミ、荒ぶるカミとして畏れられ、人を呪詛する際、祈願の対象となるカ

ミでもある。それと同時に、八丈島・青ヶ島の屋敷地には、「金山様」「金山彦」といった文字を彫り込んだ小祠が病氣直しの祈願のために祀ってある場合もみられる。このカナヤマサマの治癒神としての側面については、今日までほとんど報告されたことがない。そこで、本稿では、まず、この治癒神として祀られるカナヤマサマについて、八丈島・青ヶ島両島の内、特に八丈島での実態報告をおこなう。それとともに、カナヤマサマの祭祀に中心的に関わる巫者の活動についての事例報告をおこなう。

八丈島では、平成14年に96歳のミコが亡くなって以来、表立って巫業に携わる者は今日(平成22年10月)に至るまでいない。しかし、かつて八丈島には多くのミコが存在し、巫俗が盛んであった(青ヶ島では、平成22年現在、5名程のミコが存在する)。彼女(彼ら)の活動は、当該地

* つちや ひさし 順天堂大学非常勤講師

** ほりぐち きゅうごろう 文教大学人間科学部人間科学科

域の病氣観や治癒に関する観念の形成を理解する上で不可欠のものであり、カナヤマサマの性格形成にも大きく寄与していると考えられる。

ところで、医療人類学者の池田光穂は、治癒神を問うことの意味を、次のように指摘している。

治癒神には、〈ひとが病いになること〉、すなわち病者、治療者、家族、共同体、病いに関する信念、あるいはこころの安寧、治癒の源泉など、およそ人々が考える健康についての観念が凝縮されているのだと言っても過言ではない。健康を即物的な身体だけに還元する思考が主流になっている今日において、世界のいろいろな治癒神への関心を強調することは、健康にまつわる豊かなイメージを取り戻すうえでも重要なことと思われる [池田 1989:11]。

この池田の発言になぞらえていうならば、治癒神カナヤマサマには八丈島・青ヶ島における健康についての観念が凝縮されているといえよう。

1. カナヤマサマの先行研究

八丈島は、東京の南方海上287kmに位置し、面積69.52km²、周囲58.91kmの瓢箪型の島であり、二つの火山（三原山700.9m、八丈富士854.3m）からなる火山島である。人口は、8,248人（平成22年9月1日現在）、毎年、人口は減少している。

集落は、三原山を中心とした檜立、中之郷、末吉の坂上地区と、行政・経済の中心である大賀郷、三根の坂下地区に大別される。

八丈島の北西7.5kmの海上には、面積3.1km²の八丈小島があるが、1969年に全島民が島を離れ、現在は無人島となっている。また、南方67kmの海上には、面積5.97km²の青ヶ島がある。現在、人口は177人（平成22年9月1日現在）であり、この島は、一島で一村を形成しており、日本で最少人口の自治体としてその名を知られている。

八丈島、八丈小島、青ヶ島は、地理的に近いこともあり、黒潮以南の伊豆諸島南部地域として古来より人的・物的交流が盛んで、ほぼ共通の文化圏を形成してきたといつてよい。このことは、宗教文化においても同様で、民間信仰や巫俗にも似

通った形態がみられる。

同上3島では、文化人類学・民俗学をはじめ、地理学や宗教学、生物学、地質学等の各種の調査が盛んにおこなわれてきたが、カナヤマサマについての記述は、昭和13年と昭和24年に八丈島に渡り、その時の調査を基に民俗誌を書いた大間知篤三の記録がもっとも詳しい。以下に引用してみたい。

カナヤマ様は鍛冶の神で、鍛冶屋に祀つてある。一二月八日に村の人々が拝みに行く。鍛冶屋の跡にも祀つてある例がある。鍛冶屋は村を去る場合には普通おをさめしてゆくものだといふ。この神にマジカしたら（呪詛されたら—土屋）必ず罰がある。末吉村では最も荒い神として恐れられ、どんなに強情張つてみても、それではカナヤマ様を拝むがどうかと迫られると、直ちに白状するほどだといふ。この村に片目の人がゐるが、それは子供の頃に弓矢遊びをしてゐて片目を射られてそうなつたのである。それは彼の祖父がカナヤマ様をおろそかにしたためであり、祖父に最も可愛がられた彼に罰があつたためであるといふことを、彼は巫女の言葉によつて固く信じてゐる（傍線土屋）。その災難の直後に巫女にみてもらひ、オハタシ（祟りを解くこと—土屋）して貰つたといふ [大間知 1951:250]。

この大間知の報告には、カナヤマサマの、呪詛に使われるカミ、崇るカミとしての性格がよく示されている。また同時に、そのカナヤマサマの威力を畏怖する島人の姿もはっきりとみて取れる。この大間知の報告するカナヤマサマ像を補足する事例として、例えば、「（末吉地区の—土屋）台ヶ原には（カナヤマサマは—土屋）1ヶ所しか祀られていない。内地から流れて来た鍛冶屋の屋敷跡に祀られているという。昔は鍛冶屋に頼むと、人を呪い殺してくれたともいう。（中略）このカナヤマサマの前では、人に嘘をついたりなどの悪事はできぬものという」[東京都教育委員会 1960:1168-1169] などがある。また、隣接する青ヶ島での事例を、文化人類学者の蒲生正雄や坪

井洋文等が報告している。それによると、青ヶ島では、カナヤマサマは猿田彦で火の神だといわれているという。そして、カナヤマサマを祀る家が14軒あり、各々の家が氏子をもっているとのことである。以下、カナヤマサマの性格に関する部分を引用する。

カナヤマサマは非常に崇りやすい神であるが、もしカナヤマサマを祀っている家の者と喧嘩をすると、カナヤマサマが加勢するから負けてしまい、多くの不幸が続くというのである。喧嘩の内容には、牛のこと、水のこと、悪口をいったことなどがあるが、数世代前にまでさかのぼった先祖の時に、と説くのが普通である。その判断はすべて巫女が行なっている。ある家で原因不明の不幸が続くと巫女のところへ拜んでもらいに行き、巫女が某家（必ずカナヤマサマを祀っている家）の先祖と喧嘩した祟りだから、その家のカナヤマサマのオボシナになれと伝える。旧一月の祭には巫女、舎人も赴いて祭を執行するのである（傍線土屋）〔蒲生他 1975:350-351〕。

青ヶ島でも、八丈島と同じく、カナヤマサマは祟る怖いカミとして認識されていたことがわかる。この点に関して、筆者がおこなっている最近の調査でも、八丈島の5地区及び青ヶ島で同様の結果を得ており、八丈島、青ヶ島両島民のカナヤマサマに対する認識は、今日に至るまで変化していないといえる。

また、大間知にしろ、蒲生等がおこなった調査にしろ、カナヤマサマの性格形成には、当該地域のミコの存在が大きな役割を果たしていることが伺える。上記両引用文中の傍線部分を参照して欲しいのだが、大間知の報告では、子どもの頃に片目を事故で失った人が、その事故を祖父がカナヤマサマを軽んじたための祟りであるとのミコの言葉を固く信じている、とある。また、蒲生他の報告では、打ち続く原因不明の不幸をカナヤマサマの祟りであるとミコが説明する、とある。

このように、八丈島や青ヶ島では、ミコの言説を通して、呪詛のカミ、祟るカミとしてのカナヤ

マサマの性格が再生産され、また同時に強化されてきたのではないかと思われる。

2. 治癒神として祀られるカナヤマサマ

次に、治癒神としてカナヤマサマを祀る八丈島での事例をみていきたい。

まず、末吉在住の女性の事例をあげる。

〔事例1〕末吉地区在住の女性（平成21年現在、80代半ば）

昭和30年代の後半に、今まで働き者であった夫（40代前後）が突然「ノイローゼ」になる。クニ（本土）の精神病院に入院したが、退院後も夫のイライラは治まらず、状況の変化がみえなかったので、数年後に再び、別のクニの病院に一年間入院させたという。この病院を退院後は、「安定剤」を飲みながらなんとか八丈島で生活することができるようになった。退院後も、一年に4回、薬をもらうために14年間クニの病院には通った。夫が病院に通うのと同時に、薬にも縋る思いでミコのところにも通った。ミコのところに、夫は行こうとしなかったため、夫の写真や肌着をもって、クライアントの女性一人が通い、オハライをしてもらったという。オハライには最低一ヶ月に一回は通ったという。

夫は、状態が悪いときは、木のサンダルを履いて屋根に上ったり、刃物をもって暴れたりしたが、オハライをうけると、不思議と治まったように思えたとのことであった。

ミコからは、夫方の先祖の人間関係のトラブル（この時、先祖はカナヤマサマによる呪詛を受けたかもしれないとのこと）が夫にかかって、今の様な状況になったといわれ、カナヤマサマを祀るように指示を受けた〔写真1参照〕¹。

カナヤマサマには、お正月に五色の御幣を捧げる等して拜んだという。御幣は今でも、お正月には上げるとのことであった。



【写真1】

事例1の女性は、「藁にも縋る思いで」ミコのところに通り、これがこの女性の言葉を借りるならば「辛い生活の救い」になっていたとのことである。ミコよりかけられた慰めの言葉や、夫の病気の原因が夫本人や家族にあるのではなく、先祖の行動にあるとの説明で、随分と気持ちが楽になったようである。また、ミコのもとに集まるクライアントがある種の共同体を形成し、そこでのお互いの励まし合いが、心の支えにもなっていたようである。

ここには、病因を当事者たちの外部に置き、当事者たちの責任を問わないことにより心の安寧を図ろうとするシャマニズムの「外部化」の機能や治療共同体としての機能が見え隠れするのだが、この点については稿を改めて考察してみたい。

さて、次に、前記の事例1のミコとは異なるミコから、病気治療のためにカナヤマサマを祀るようにとの指示を受けた男性の事例をあげよう。聞き取りは、この男性の息子からおこなった。

【事例2】 檜立地区在住の男性（平成22年現在40代後半）

クライアントの父が、昭和38年、40代前半で「胸の病気」になった時、その父は病気治療のため、ミコの指示により「金山彦尊」と彫った祠を祀った。また、その後、同一の人物（父）が、昭和51年、50代半ばで再び発病したとき、やはりミコの指示で「金山様」と書いた祠を祀った〔写真2参照〕²。この父親は、ミコに絶対的な信仰をもっており、上述の祠を祀ることにより、病気がよくなったと信じていたとのことである。



【写真2】

この他、断片的な話であったが、中之郷地区で平成20年に、80代後半の女性から、この女性が20代の時、妹が原因不明の皮膚病に罹り、ミコの指示で皮膚病治療のためにカナヤマサマを祀ったことがあるとの話を聞いた。妹の皮膚病は、カナヤマサマを祀ったところ治ったとのことだが、クライアント自身は、それがカナヤマサマを祀ったことと関係があるかどうかは解らないと語っていた。

治療神としてのカナヤマサマの機能に関して、事例1では、人間関係のトラブル（呪詛）を祓うカミとしての認識がみられ、その祓いにより病気平癒に繋がると考えられている。これまでの民俗調査では、カナヤマサマは、呪詛に使われるとされてきたが、呪詛を祓うカミでもあり、両義的な性格を有するカミとして実際は認識されていることがわかる。

一方、事例2の方では、カナヤマサマの治療神としての機能は明確であるものの、呪詛との関係性は明らかでない。しかし、クライアントによると、クライアントの父は、「金山様は力のあるカミ」という認識をもっており、「その強い力が（自分の—土屋）病気を治した」と考えていたとのことである。ここでは、カナヤマサマのもつとされる「強い力」が、治療力として作用するという認識があるということを取り敢えず確認しておきたい。

また、上記の事例から、もう一点指摘されることは、ミコの言説がカナヤマサマに呪詛に使われるカミ、崇るカミとの性格を付与する場合と同様

に、治癒神としての性格を付与してきたと考えられることである。

次章では、カナヤマサマ信仰を支える八丈島・青ヶ島の巫俗文化についてみていきたい。

3. 八丈島・青ヶ島の巫俗

3-1 巫俗の概要

八丈島でも青ヶ島でも、ミコにはミコケがある女性になるとされ（ただし、ミコケは男性にも使われることがある）、ミコケはミコとなる要件として重要視される。

ミコケとは、民俗学者の大間知篤三の言に従うと、「巫女になり得る素質」ということになる。この素質がある者は、ミコと同じく死や血に関する忌みに敏感に反応するとされる [大間知 1951:261] が、筆者の調査を通じた考えでは、ある種の霊的な才能を指し、沖縄でいうところのサーダカウマリに相当すると思われる [拙論 2006]。

このミコケのある女性（男性の場合もあり）が長じてミコとなっていくわけだが、その過程を以下に、筆者の八丈島及び青ヶ島での聞き取り調査をもとにまとめておきたい。

ミコケのある人物は、両島でカミシブレやダンシンといわれる、精神的な変調をきたす場合が多い。これは、シャマニズム研究でいうところの一種の巫病にあたると思われる。そして、この状態になると、カミソーゼという成巫儀礼を執りおこなうのが一般的である。この儀礼は、島の祭祀集団がおこなうが、八丈島では、早くから祭祀集団が消滅したために、ミコの仲間内でおこなわれる形態となった。

しかし、隣接する青ヶ島ではこの祭祀集団が今もかろうじて残り活動を続けている。

青ヶ島の祭祀集団はいくつかの成員からなり、カミソーゼのみならず、共同体の祭祀や各種の個人的な祭祀をおこなってきた。

元青ヶ島村助役で祭祀集団の一員でもあった菅田正昭の話によると、青ヶ島の祭祀集団は、座や講的要素が強く、一般島民はやや蔑称的に「拝み仲間」と呼び、成員たちもそのように自称しているという。

菅田は、祭祀集団を以下の5種類の成員に分類している。

- a.カンヌシ(神主)…奥山神主家の世襲。ただし、本来は卜的な能力が求められる。いわゆる神社神道の宮司とは役割が違う。
- b.ハカセ(博士)…陰陽道の影響か?この職掌は明治中頃には廃絶か?
- c.ウラベ(卜部)…ベテランの社人の中から選ばれる。太鼓を叩きながら祭文を読み上げる。桴さばきひとつで、社人・巫女の動きをリードするサニワ(審判)の霊能力も必要。神主が不在のときは代理をする。
- d.シャニン(社人・舎人)…祭りのとき、卜部の指示で御幣(ゴヘイ)を切ったり、キョウモン(祝詞、祭文、経文の総称)を読む。巫女と一緒に祭文にあわせてカグラ(神楽)を踊る。
- e.ミコ(巫女)…ミコケのある女性の中からカミが選ぶ。組織的な序列としては下位になるが、青ヶ島の祭りにおいては、その存在は絶対に不可欠。儀式の最中に神がかかることもある。

菅田の言に付け足すならば、平成22年現在、通常行われる島の祭祀に参加するメンバーは、カンヌシ1名、シャニン1名、ミコ3,4名となっている。

さて、これらの成員がカミソーゼを執行するわけであるが、カミソーゼは一度で成功するとは限らず、人によっては、二度三度とおこなう者もいるという。

ウラベのサニワによって、「カミがついた」と認められると、そのカミをオボシナサマ(ミコの守護神のこと)としてミバコ(御箱)と呼ばれる箱に入れて祀ることとなる。以後、このオボシナサマがミコに協力して、シャマニックな能力を授けることとなるのである。

オボシナサマの数は、人により異っており、ミコがカグラを舞うときの微妙なステップの違いによりその数を判定することも可能とされる。

先にも述べたが、カミソーゼの儀式は、ミコケがあるとされる人物が、カミに選ばれない限り成

功したことは成らないため、儀式の執行が直接に成巫を約束するものではない。

かつては、ミコのみであったカミソーゼであるが、現在では、ウラベやシャニンになる時にもカミソーゼをうけるとのことである。

先にも述べたが、残念ながら八丈島ではこうしたシステムティックな構造はすでに崩れており、先輩ミコを中心とした集団が青ケ島の「拝み仲間」の役割を担ってきたのだが、それも、八丈ミコの実質上の消滅とともに祭祀集団も形成のしようがない状況である。そうした現状をみるにあたり、八丈島でのカミソーゼは事実上不可能であり、もしカミソーゼを希望する者がいたとしても青ケ島へ渡っておこなうという形態を取らざるを得ないと思われる。

さて、こうして、祭祀集団の成員となったミコやシャニンは、共同体の祭祀や病気平癒、失せもの探し等の個人の祭祀に応じるようになっていくわけである。次節では、こうしたミコの諸活動の中でも、本稿と関係の深い病気平癒の活動、そのベースとなる「病気」観や治癒に関する観念をみていきたい。

具体的には、青ケ島出身で、八丈島で活躍してきた（いる）巫者一族の事例を報告する。

3-2 八丈島巫者一族の「病気」観

この一族を仮にAとする。Aにおいて巫業に携っている（いた）のは三人である。年齢順に、仮に、a、b、cとすると、aとbは兄妹、aとcは父と息子の関係である。

尚、以下はcからの聞き取りである。まずは、Aの成員について報告をおこなう。

a（男性）1901年、青ケ島生まれ、1973年没。子どもの時分よりミコケがあったが、カミの道へは進まず、牛を飼うなどの事業をしていた。しかし、事業に失敗して八丈島へ。八丈島で、長男を海で亡くしたことがきっかけとなり、カミゴトを始めるようになる。ウラを出す（カミやホトケ等の姿を見たり聞いたりして、クライアントの相談事に判断を下す）ことができる。

b（女性）1906年、青ケ島生まれ、2002年没。7歳頃にダンシンを経験。幼少よりミコケがあった。37歳頃カミソーゼを受け、青ケ島でも祭祀に参加していた。60代半ば、夫の死を契機として八丈島に渡り、aとともに巫業に携わるようになる。ウラを出すことができる。

c（男性）現在（2010年）、50代半ば。30年前にカミソーゼを青ケ島でおこなう。オガミやオハライはするが、a、bのようにウラを出すことはできない。

aは、bが八丈島に渡ってくるまでは、一人で巫業をおこなっていたが、bが八丈島に来た後は、aがカンヌシ・シャニンの役を、bがミコの役をおこなっていた。つまり、青ケ島の祭祀集団の形態をaとbの兄妹でおこなっていたわけである。aが亡くなった後、bはcを助手とすることもあった。

a、bもウラを出すことができたが、巫儀の基本は、ミコのbがウラを出し、そのウラによりクライアントへさまざまな指示を与えるという形態であった。

また、巫儀の際使用する祭文・祝詞は、青ケ島のものとクニ地（本土）のもの両方を使用した。

次に、Aが共有する「病気」観と「治療」観に関わる言説をみていきたい。尚、矢印を境として前半が「病気」観に関する言説、後半が、その「病気」に対する「治療」観に関する言説である。

① その人にカミサマが憑依しているのにカミソーゼをしない。本人が分かっていない、あるいは、分かっているのにカミソーゼをしてカミの道を進まない（ミコにならない）。そうしてカミの知らせを無視していると知らず知らずのうちにフジョウ（不浄）になる。身が重くなる。これを一般には「病気」と表現しているが、「病気」とは違う。

→取り敢えず、応急処置としてオハライをする。然る後に、カミソーゼをしてカミの道に進むことを勧める。

② インネン（因縁）といって、人の恨みをかうと、これが元で身心に変調をきたす。自分自身がかった恨みだけでなく、先祖がかった恨みも子孫に作用する。これがフジョウとなり、これを解かなくてはならない。

→①の場合と同様にオハライをおこなう。しかし、インネンを解くのはなかなか大変。重い場合は、二十一日間お祓いを続ける「二十一日祓い」等をおこなうが、その時は一時的に良かったようにみえても、直に元に戻ってしまう。また、カナヤマサマを祀るなどもする（傍線土屋）が、インネンを解くには、長い時間かかる。

③ キモン（鬼門）を汚したり、その年の悪い方角に手をつけるとフジョウとなり、寝たきりになったり、痛みが全身を走ったりする。
→「方災除け」や「砂撒き」等のオハライをおこない、フジョウを除く。

④ かつて、先祖が祀っていたり、現在の土地の前の持ち主が祀っていたのに、今では祀られなくなったカミが、縁のある人(かつて祀っていた人の子孫や現在の土地の持ち主等)にかかって体が重くなることがある。

→かかってきているカミをきちんと祀るように指示を出す。祀り方は、そのときそのときにより異なる。

⑤ 八丈島は、いうまでもなく海に囲まれているので、海で亡くなった先祖は必ずいる。その成仏できていない先祖等が頼ってきて、フジョウとなり体が重くなることもある。

→「不浄舟」や「七艘小舟」³等の「流しもの」をしったりすることにより、フジョウを除く。

⑥ オガミやハライではなく、病院に行った方が良い場合ももちろんある。

→病院にすぐ行くように勧める。手遅れであることが分かる場合もある。

まず、上記の「病気」観で気がつかされるのは、Aが「病気」を、医療人類学等で指摘するところの「疾病」と「病い」とに類別するまなざしをもっているという点である。前者に対しては、病院に行くことを勧め、Aは後者にのみ関わろうとする。実際は、cによると「疾病」と「病い」の類別は難しく、病院に通うのとオハライとの両方をおこなうのを勧めるとのことであったが、aやbは、この辺の類別をかなりの精度でおこなっていたという。

ところで、本稿の主題とするカナヤマサマは、Aの言説では②でいうインネンと関わる（②の傍線部参照）。人からの恨みの中には、当然呪詛も含まれることになる。インネンによるフジョウを祓う強いカミがカナヤマサマというわけである⁴。

次に、呪詛とカナヤマサマの関係について、一旦聞き取りの場から離れて、ミコを始めとした巫者が巫儀の場に於いて使用する祭文・経文を考察の対象としてみたい。

4. 祭文・経文に現れたカナヤマサマ

八丈島や青ヶ島には、多くの祭文・経文がのこっており、それらは、祭儀の折りに現在でも用いられている。その中から、カナヤマサマに関わる祭文・経文の幾つかを挙げながら、そのカミとしての性格を明らかにしていきたい。まずは、「金山の祭文」と題されたものの冒頭部分を以下に挙げてみたい。

きんぜい 東方の水神に 掛けてしたる 呪詛なれば 東方の川に 切り流せ 金山 きんぜい 南方の水神にかけてしたる 呪詛なれば 南方の川に 切り入れ切り流せ 金山 きんぜい 西方の水神に 掛けてしたる 呪詛なれば 西方の川に 切り入り切り流せ 金山 きんせい 北方の水神に掛けてしたる 呪詛なれば 北方の川に 切り入り切り流せ 金山 きんせい 中方の水神に掛けてしたる 呪詛なれば 中方の川に 切り入れ切り流せ [金山 1985:1127]

ここでは、東南西北中の五方向の「水神」に掛けた「呪詛」を流して祓う「金山」の働きが強調されているが、祭文・経文は、この冒頭部に続いて、東南西北中の宮から出て来た「鬼神王」の頭を切り砕くのは「金山」であるとする部分が続く。そして、やはり東南西北中からより来る「天明大悪神」の呪詛を打ち返すのも金山である旨が語られる。

このように、次から次へとあらわれる、「鬼神」や「悪神」を打ち砕く力強いカミとして「金山」は描かれるのであるが、これにさらに以下の部分が続く。

きんぜい 子の日 子の時 子の方にて 生れたる男女の 子の方にてしたる呪□を 打ち返すも 我ぞ金山 きんぜい 丑の年 丑□日 丑の時 丑の方にて 生れたる男女の 丑の方にてしたる 呪詛を 打ち返すも 我ぞ金山 [金山 1985:1129]

ここでは、十二支に割り振られた男女、即ち全ての人びとが十二の方角、即ち、全ての方角においておこなった呪詛を打ち払うのが「金山」であるとの内容が語られる。つまり、「邪神」や「悪神」といったカミを用いた呪詛のみならず、「人の呪いの念」に対しても「金山」の力を借りて念入りに、「呪い返し」をおこなおうとするのである。

祭文・経文は、こうした様々な「呪詛」に対して、「金山」のカミのみで対応しようとしており、呪詛返しのカミとしての「金山」への信頼が伺える。ただ、ここで一点、カナヤマサマの尊格について注意を喚起したいことがある。まずは、カナヤマサマの本地を述べた「かな山のさいもん」と題された祭文・経文の一部を以下に引いてみよう。

之れ金山の御本地を 尋ね奉れば 釋加ムニ 如来 小鍬は 彌録菩薩 大箸は 薬師如来 小箸は 阿彌弥如来 金敷は 大日如来 炭カキは かしき王子 大吹□ 徳婦の王子 土地金は 支天の観音 大太金は 地藏菩薩 砥船は 三見王菩薩 荒砥は 観光菩薩 大線は 日光菩薩にて おはします [金山

1985:1130-1131]

この後、祭文・経文は、カナヤマサマが強い呪力で「悪霊」や「死霊」を打ち払う場面へと展開していく。

ここで留意して欲しいのは、鍛冶屋の使う個々の道具一つ一つに強力な呪力が籠っていることが伺われることである。「金山」の「御本地」は、「釋加ムニ如来」とされ、この如来を総大将に、一つの「金山軍団」とでもいったものが形成されている。実際、カナヤマサマは、鍛冶屋の使う・使った道具に籠っているとされ、筆者の八丈島での調査においても、その道具自体を御神体として祀っている事例に出会ったことがある。例えば、大賀郷地区の先祖が鍛冶屋であったある家では、自宅の庭のかつて鍛冶の炉があった辺りに、カナヤマサマを祀るお堂を建て、その中にカナヤマサマの石祠とともに、嘗て使用していた鍛冶道具の一切を丁寧祀っていた。

「金山」の尊格について、日本宗教思想史を研究する山本ひろ子は、安芸国佐伯郡に伝わる「金山の祭文」について記述した文章の中で、「グループ・ソウル(集団魂)」という概念を提出している。山本はカミの実像を単一の尊格に求めようとする近代的な思惟に注意を促し、一つのグループとして、一つの神格を形成するところに中世の思考法の特徴をみようとしている[山本 1997:42-43]。筆者が引用した祭文・経文におけるカナヤマサマの尊格も、山本の指摘するグループ・ソウルと考えてよからう。

このように、祭文・経文の中のカナヤマサマは、「集団魂」として強力な呪力をもち、数々の呪詛や死霊を打ち払うカミとして描かれているのである。

こうした祭文・経文が、ミコ等の巫者を中心とした祭祀集団を通して、八丈島・青ヶ島の宗教文化に、ひいては、健康観に影響を与えたことは、容易に想像されよう。

おわりに

ここまで、治癒神としてのカナヤマサマの側面

を報告することにより、呪詛とミコと病いが織りなす八丈島・青ヶ島の健康観が垣間見えてきた。

八丈島・青ヶ島でのカナヤマサマは、呪詛のカミ、崇るカミとして恐れられると同時に呪詛から人びとを救うカミとして信仰もされていた。呪詛により生じたフジョウを祓うことにより、心身の不調を治癒するわけである。呪詛との関係がはっきりとみえない事例（第2章事例2参照）もあったが、その場合においても、少なくとも、カナヤマサマには強い力があり、それが「病気」を治すと信じられていた。

治癒神がアンビヴァレントな姿として認識されることは度々あることで、治癒の力が同時に人を呪う力にもなり得ると考えるのは至極当たり前のことである。一つの力がプラスにもマイナスにも作用するのである。

では、カナヤマサマのもつ治癒力の源泉はいったいどこにあるのであろうか。前述した医療人類学者の池田光穂は、治癒力の源泉について、「ちから」と「場」という用語を用いて自身の考えを展開している。

池田は次のようにいう。少々長くなるが引用してみよう。

治癒力にはたんなる治癒の文脈を越えた<ちから>と呼べるようなものと、治癒者と患者の共通感覚を前提とした演劇的な効果を支える<場>という二つの特性があることがうかがえる。<ちから>とは、いい方を換えると、文化そのものの性質のように思える。文化は、我々の世界を混沌から区分し、秩序だて、そして意味を与える。治癒力の源泉としての<ちから>を考えたとき、我々の安寧とした生活に突如として現われ世界の秩序を乱す<病い>に名前を付け、原因を確定し、治療することを、まさに<ちから>が行なっていることが明らかになる。そしてそれらの一連の行動全体こそが<癒し>といえるものといえよう。もう一方の<演劇的な効果>としての治癒力が我々に対して示唆することは、治癒力が発揮されるには、治療環境という、ちょうど<場>のような状況が不可欠なだけでなく、治療環境そのものが治癒力

の源泉となりうるということである〔池田1989:23-24〕。

ミコは、呪詛やインネンを語り、それを独特な祭文・経文を用いた祭儀により祓うことができる。こうした一連のドラマを造り出す巫俗文化が八丈島や青ヶ島にはあるのである。また、同時にそのドラマを受け入れる社会が両島にはある。八丈島・青ヶ島で、カナヤマサマが力を発揮するのはこうした「ちから」と「場」を背景にしていることであろう。

最後に、私事で恐縮であるが、筆者は現在、同門の研究者たちと八丈島・青ヶ島の民俗調査をおこなっている。

コミュニティ（共同体）としての性格を保持した地域社会に生きる人びとにとって、森羅万象の解釈や物事の判断の拠り所となり、日々の生活や家族・親族、近所付き合いなど、人間関係の展開に常に影響をもたらすのは、目に見えない在地の文化である。例えば、医療における地域・在宅ケアやデイサービス事業所などの福祉施設のあり方であり、子どもを育てる上での協力をめぐるでも、それは当てはまる。よって、在地の文化の特色を理解し、それを活かした保健や医療の施策や施設づくりが構想される必要がある。つまり、八丈島・青ヶ島の伝統的な健康観を問う作業を、両島の保健や医療の現場に於けるアクチュアルな問題⁵を解決する場面へと接続していきたいとわれわれは考えるのである。この小論がその足がかりとなればと考える次第である。

註

1 手前の五色の御幣が奉納されている石祠がカナヤマサマの祠である。

2 写真からは、解りにくいだが、三つの石祠の内、左が「金山様」と彫り込まれた石祠で、昭和51年に祀られたもの。右が「金山彦尊」と刻まれた石祠で、昭和38年に祀られたもの。真ん中の石祠は、今回話しを聞いたクライアントが、昭和51年に島を離れる時にその父がクライアントの

ために祀ったもの。八丈島では、人生の転機に石祠をつくり祈願をおこなうことがあり、この場合はこの祈願に相当すると思われる。

3. 藁で作った船の模型に、米や団子などを供え、フジョウの度合いによってオハライをする日数をきめて、満願の日に、その船を海にながすという儀礼である。これにより、フジョウが除かれるとAは考えるのである。

4. 八丈島の「病気」観に関する先行研究は、1970年代にミコの調査をおこなった蛸島直の業績が主なものである。

彼は、島の民俗病因論を明らかにするために、積極的なフィールドワークを実施し、ミコ15人から聞き取り調査をおこなうとともに、何らかの体調不良等のためミコにかかった人の事例48を公表している（この中に、呪詛をハラウためにカナヤマサマを祀る明確な事例が一例みられる）。この事例を、蛸島は、「起因者」（患者や犠牲者が病気を起こす最初のきっかけをつくった者）と「作用者」（起因者の行為に触発されて、患者に直接病気をもたらすもの）という二つの用語を用いて過程的に分析し、以下の六つの類型を提出する。

(1)因縁(2)呪詛(3)祟り(4)祀り不足(5)召命(6)告発

ここでいう、(1)は「患者の発病の起因を何代か遡った祖先の行為に求めたもの」、(2)は(1)と同様に「起因者が作用者の恨みを買ったことに起因している」もの、(3)は「神聖な事物に対して不敬行為を働いたことに起因する」もの、(4)は「死者の供養が足りないために、その子孫が病気に」なるもの、この場合は、子孫と先祖の関係が、起因者と作用者の関係になるわけである。(5)は「神からミコになるよう選ばれたということに病因を求めるもの」、(6)は「犯罪や争い事が起きた場合にカナヤマサマを拜んで罪のある者を告発、あるいは威嚇するもの」ということとなる。告発された者は、何らかの体調不良を訴えたり、災難に見舞われたりするわけである [蛸島 1981:77-79]。

蛸島の研究は、伝統的な巫病が衰退している現在の八丈島では、得ることができない貴重なデータをわれわれに提示してくれており、八丈島・青ヶ

島の「病気」観を考察する上での重要な資料となっている。この蛸島の先行研究にAの言説の①から⑤までを当て嵌めると、①は「召命」に、②は「因縁」に、④は「祟り」に、⑤は「祀り不足」に相当すると思われる。ただし、③の方位に関する禁忌を犯すことが「病気」の原因となるとする認識は、蛸島の類型にはみられないパターンであり、八丈島の民俗病因論の一つとして捉えられるかどうか、今後の調査課題の一つである。

尚、この点に関して、祭文・経文研究から一言しておく。

金山正好が収集した「八丈島系ト部傳承の祭詞祈願文」には、「生靈 死靈 神祟り 普請方災 惡靈 怨敵 狐狸を放ち清め 病災平癒を神に祈るときの 唱へ詞」[金山 1985:1193]と題される祭文・経文があり、八丈島、八丈小島、青ヶ島の民俗病因観の一端が伺える。この中の「普請方災…を放ち清め 病災平癒を神に祈る」という表現からは、明らかに方位に関する禁忌を侵すことが「病気」の原因となるとの認識が伺える。

5. 例えば、八丈島では、現在、自殺とその背景にあるとされるうつ病の問題が焦眉の急を要する課題としてある。八丈島の地方紙『南海タイムス』（2010年8月6日付け）によると、「96年から08年までの13年間、島しょ（伊豆・小笠原諸島）で自殺した人の数は149人。その半数近くを八丈島が占める。対10万人人口の自殺率でみても八丈町は都の平均の約3倍と高く、自殺の『ハイリスク地』となっている」とある。

<主な参考文献>

- 池田光穂 1989『医療と神々』平凡社
池田光穂・奥野克巳共編 2007『医療人類学のレッスン』学陽書房
石塚尊俊 1982『鑪と鍛冶』岩崎美術社
大間知篤三 1951『八丈島—民俗と社会—』創元社
金山正好 1985「八丈島系ト部傳承の祭詞祈願文」『東京都民俗藝能誌・下巻』錦正社
蒲生正雄他著 1975『伊豆諸島』未来社
小林亥一 1991「青ヶ島の信仰—島神信仰を中心として—」『海と列島文化第7巻 黒潮の道』

小学館

斎藤英喜 2002 『いざなぎ流祭文と儀礼』法蔵館

佐々木雄司 1967 「我国における巫者 (Shaman) の研究」『精神神経学雑誌』第69巻第5号

蛸島直 1981 「八丈島の病気観」『民俗学評論』通巻20、21合併号

田村克巳 1983 「鉄の民俗」『稲と鉄』小学館
1977 「天目一箇神」『講座日本文学神話下』至文堂

東京都教育委員会 1960 『伊豆諸島文化財総合調査報告第4分冊』

山本ひろ子 1997 「鉄の女」『へるめす』終刊号
岩波書店

拙論 2006 「八丈島における巫俗の一考察」『生活科学研究』第28集 文教大学生生活科学研究所

[抄録]

カナヤマサマは、鍛冶屋のカミ、火のカミとして知られる民俗神であるが、本稿では、その治癒神としての側面を八丈島・青ヶ島での調査に基づいて報告し、両島における健康観の一端を考察した。

その結果明らかになったのは、以下の点である。

一、カナヤマサマは、呪詛の力を発揮するカミであるとともに、呪詛を祓うカミでもあるという両義的な性格を有すること。

二、呪詛によって生じるフジョウが、病いの一因と両島では考えられており、それを祓う力をカナヤマサマが有するが故に、治癒神として祀られること。

三、両島におけるカナヤマサマの性格形成には、ミコの果たす力が大きいこと。

以上の点を報告した上で、両島の医療や福祉の分野に置ける現実的な課題を考えていくにあたり、両島が育んできた民俗レベルでの健康観に対する理解の必要性を指摘した。
